

## 芦峯寺宝泉坊の江戸での檀那場形成と「立山信仰」の展開(2)

—江戸時代後期の江戸城大奥及び諸大名家をめぐる立山信仰—

福江 充\*

### はじめに

平成18年12月2日、筆者は立山山麓芦峯寺村の旧宿坊家・宝泉坊の跡地に残る倒壊寸前の土蔵で、同坊に関する膨大な古文書や書籍、雑器、版木などを確認した。後日、これらは富山県〔立山博物館〕で管理することになり、筆者はその整理・調査にたずさわっている。

これらのなかで特に古文書史料を整理していくうち、その幾つかから、江戸時代後期、立山信仰は庶民層にだけでなく、江戸城の関係者や諸大名家など近世身分制社会の最上級の人々にも受け入れられていたことがわかってきた。

本稿では、先述の古文書史料群のうち、江戸の檀那場を対象とする廻檀日記帳や奉加帳、あるいは立山曼荼羅「宝泉坊本」とその寄進状などの関連史料を主な分析史料として用い、特に文久元年(1861)の4月と5月の2ヶ月間に、宝泉坊の立山曼荼羅(現、立山曼荼羅「宝泉坊本」)が江戸城や諸大名の屋敷などで回覧された出来事に着目し、それがどのような経緯で実施されるに至ったのかを検討していくことで、江戸時代後期の宝泉坊と江戸城大奥及び諸大名家との関係を明らかにしていきたい。

ところで、江戸城大奥女中に関する研究成果としては、主なものに、松尾美恵子氏「江戸幕府女中分

限帳について」(『学習院女子短期大学紀要 第30号』1992年)、竹内誠氏「大奥老女の政治力」(『図説人物日本の女性史』小学館)、畑尚子氏「将軍代替りにおける大奥女中の人事異動」(『國史学 第183号』2004年)、同「尾張徳川家の奥女中」(『徳川林政史研究所研究紀要 第40号』2006年)。同『江戸奥女中物語(講談社現代新書1565)』(講談社、2001年)、同『幕末の大奥 天璋院と薩摩藩(岩波新書1109)』(岩波書店、2007年)、山本博文氏『将軍と大奥 江戸城の「事件と暮らし」』(小学館、2007年)、安藤優一郎氏『江戸城・大奥の秘密(文春新書576)』(文藝春秋、2007年)などがあり、この他にも深井雅海氏、氏家幹人氏、高澤憲治氏、長野ひろ子氏らの著作や論文がある。

ただし、江戸城大奥女中の信仰生活に関する論文はいたって少なく、まとまった研究成果としては望月真澄氏<sup>1)</sup>の一連の論文や著作が見られる程度である。こうした状況のもと、芦峯寺宝泉坊といった特定宿坊家の廻檀配札活動に見る一事例ではあるが、江戸城大奥女中と宗派信仰ではない立山信仰とのかわりを示す本稿は、いまだ考察が少ない江戸城大奥女中の信仰生活を明らかにしていくうえでの一助になるものと考えている。

### 1. 宝泉坊と江戸幕府第11代将軍徳川家斉正室広大院付大奥女中

旧宝泉坊土蔵文書の史料群のなかに、天保3年(1832)10月26日付けの一紙文書(断簡)<sup>2)</sup>が見られる。紙面の右端に先述の日付が記され、次行から「辰ノ十月廿二日 為御菩提」として、江戸城本丸

大奥女中の善智院・紫雲院・妙智院・善珠院・義操院・仙蓮院・到林院・嶺岩院・専遊院・福昌院ら10名の名前が列記されている。

この文書の内容に新たな事項を書き加え、後の時

\*富山県〔立山博物館〕

期に採録したと思われる記事が、宝泉坊の文久元年(1861)の廻檀日記帳<sup>3)</sup>に見られる。以下はその内容である(史料1)。

【史料1】

七観世音石像壱鉢

一、金三両 御本丸

秋月院様  
 妙好院様  
 豊儉院様  
 志ヶ野様  
 心光院様 宛

万延元九月十四日払  
 メ

同

一、金三両 壱鉢施主

天保年中

辰十月廿六日為御菩提

御本丸

善智院  
 紫雲院  
 妙智院  
 善珠院  
 義操院  
 仙蓬院  
 到林院  
 嶺岩院  
 専遊院  
 福昌院

メ十人

観世音花瓶壱ツ

一、金百疋 仰願院

是外ニ彫刻可致候事。

右式鉢御本丸与前ニ記等々取究候事。

金三両 壱鉢

為御武運長久御子孫繁榮饒先祖代々菩提ニ観世音石像壱鉢造立被成候事。

江戸本郷御弓町

永井六之助義毅

芳善院事浄利

奥様事智芳

右三鉢共造立開眼供養供物上ル事。考江文ハ紙等上テ町寧ニいたし指上ル事。絵図面石工ト究、指上候事。

上記の記事によると、宝泉坊は「七観世音石像」と称する3体の石像を、別々の時期に1体ずつ寄進されたようである。もっとも宝泉坊は石像そのものの完成体を寄進されたのではなく、その製作費用を寄進されていた。したがって宝泉坊が実際に石像を製作したのか否かは、実物が残っておらず不明である。

3体のうちの1体は、万延元年(1860)9月14日に江戸城本丸の秋月院・妙好院・豊儉院・志ヶ野・心光院の5名から寄進されており、宝泉坊はその費用として金3両を受領している。ちなみに、秋月院は第12代將軍徳川家慶付御中臈おつゆ(家慶側室)である。妙好院は家慶付御中臈およきである。豊儉院は第13代將軍徳川家定付御中臈おしが(家定側室)である。志ヶ野は家定付表使格御右筆頭である。心光院の素性は不明である。

一方、七観世音石像の別の1体は、これよりもかなり以前の天保3年(1832)、前述の断簡文書にもあったように、江戸城本丸大奥女中の善智院・紫雲院・妙智院・善珠院・義操院・仙蓬院・到林院・嶺岩院・専遊院・福昌院ら10名から寄進されたものである。この時も費用として金3両を受領している。

なお、この10名の女性たちは皆、江戸幕府第11代將軍徳川家斉の正室・茂子(1773~1844、法号は広大院)付の江戸城大奥女中であつた<sup>4)</sup>。彼女たちの素性は次のとおりである。

善智院(藤島)の旧職制は御年寄、宿元は駒井駒之助(小石川伊賀坂)である。紫雲院(花川)の旧職制は中年寄、宿元は後藤金弥(築地門跡様)であ

る。妙智院(すま)の旧職制は御中臈頭、身分は御使番、宿元は川田米次郎(本所南割下水)である。なお、妙智院及び宿元の川田家は宝泉坊の慶応2年(1866)の「東都檀那帳」<sup>31)</sup>に檀家として名前や住所が記されている。善珠院(みせ)の旧職制は御中臈、宿元は佐橋弾正(市ヶ谷浄瑠璃坂)である。なお、富山市月岡の真言宗龍高寺に大奥俗名リヲの位牌が残っており、その裏面には「御本丸善珠院智啓妙通貞了大法尼」と記されている。義操院(かせ)の旧職制は御中臈、宿元は久保吉太郎(小石川御門内)である。仙蓬院(るせ)の旧職制は御中臈、宿元は高林音次郎(四谷鮫橋谷町)である。到林院(てよ)の旧職制は御中臈、宿元は小林荒之助(牛込若松町)である。嶺岩院(岩山)の旧職制は表使、宿元は飯室孫兵衛(駒込土物店)である。専遊院

(田村)の旧職制は表使、宿元は村垣左太郎(築地三之橋)である。福昌院(福山)の旧職制は表使御次、宿元は鳥山與一郎(赤坂元水川)である。

残りの1体は、宝泉坊が、同坊と師檀関係を結んでいた本郷御弓町在住の旗本・永井六之助の母(実母か義母のどちらか)の芳善院と妻の智芳から寄進されたものである。やはり、この時も費用として金3両を受領している。

さて、天保3年(1832)当時、宝泉坊の住職は第45代照円(1775～1842)であった。照円の経歴は、以前、拙稿「芦嶺寺宝泉坊の江戸での檀那場形成と「立山信仰」の展開(1)」<sup>32)</sup>に詳述しているのでここではとりあげないが、照円の活躍期に、宝泉坊は既に江戸城大奥と何らかの関係をもっていたと考えられる。

## 2. 宝泉坊と江戸幕府第12代将軍徳川家慶付上臈御年寄山野井

宝泉坊照円の天保10年(1839)の「御祈禱檀那帳控」<sup>33)</sup>には、次の記載(史料1)が見られる。

### 【史料1】

市ヶ谷	尾州様御屋敷
一 上	御表様
一 上	御奥様
御本丸	御年寄
一 上	山の以様

上記の「市ヶ谷尾州様御屋敷」は尾張名古屋藩江戸市ヶ谷御門外の上屋敷のことであり、「御表様」は尾張名古屋藩第11代藩主徳川斉温のことである。さらに、「御本丸御年寄」の「山の以様」は、江戸幕府第12代将軍徳川家慶付上臈御年寄山野井のことである。

畑尚子氏「将軍代替わりにおける大奥女中の人事異動」所収の第6表「老女一覧」<sup>34)</sup>によると、徳川家慶の将軍世子から将軍在職中にかけての老女(上

臈御年寄)の補任状況は以下のとおりである。

天保8年(1837)3月の将軍世子家慶付け老女は山野井・姉小路・浜岡・滝津の4名がいた。天保8年(1837)12月の将軍家慶付け老女は飛鳥井・山野井・姉小路・野村・浜岡・滝津の6名がいた。天保11年(1840)の将軍家慶付け老女は山野井・姉小路・浜岡・滝津・梅田の5名がいた。天保12年(1841)4月の将軍家慶付け老女は山野井・万里小路・姉小路・浜岡・瀬山・滝津・梅田・花崎の8名がいた。

こうしてみると、山野井は老女の職階者のなかでは、同格者に家慶時代の大奥を牛耳っていたといわれる公家の橋本家出身の姉小路も存在しているが、序列の上ではそれをおさえて絶えず筆頭であった。

ところで、山野井は将軍家慶が嘉永6年(1853)6月22日に亡くなったのち江戸城本丸を離れ、名古屋藩の市ヶ谷上屋敷に転居したようである。宝泉坊泰音の嘉永6年(1853)の檀那帳<sup>35)</sup>には次の記載(史料2)が見られる。

【史料2】

市ヶ谷

一 尾州御殿

同御取次

おさい様

磯治様

山の井様

山野井と名古屋藩との具体的な関係は不明である。どのような理由で將軍付上臈御年寄として江戸城大奥女中の最高位まで上りつめた山野井が、いかに徳川御三家の一家とはいえ、格下には違いない名古屋藩に下向したのかはわからない。

ただし前述のとおり、山野井が宝泉坊の2冊の檀那帳に記されていることは意味がある。それは宝泉坊と山野井の関係が一過的なものではなく、「御取次」役として、継続的かつある程度安定したものであったことを示しているからである。

前項で述べた宝泉坊と広大院付大奥女中たちとの関係も併せて考察すると、彼女たちはいずれも大奥女中の職制上、最高位者であり、下位の女中たちには当然影響力があったはずである。したがって天保期以降、宝泉坊によって、立山信仰が江戸城大奥に何らかの方法で広められ、ある程度それが根付いていたと考えなければならない。

### 3. 芦畷寺相栄坊と將軍世子徳川家定（後の江戸幕府第13代將軍）付上臈御年寄八重嶋

江戸時代後期、江戸で廻檀配札活動を行っていた芦畷寺相栄坊は、嘉永5年（1852）6月に、江戸城西丸大奥の老女八重嶋より、芦畷寺嬪堂への奉納品として2体の地藏菩薩石像を寄進されている。この2体の石仏は、当時、病気で自分の死期が間近であることを悟った八重嶋が、死後、万が一自分が「地獄」や「餓鬼」の苦界に堕ちた場合の救済を願って、信珠院と称する女性（素姓不明）に寄進の一件を託し、彼女に実務をまかせるかたちで、地獄信仰で著名な立山に寄進したものである<sup>101</sup>。ただし、八重嶋は嘉永5年（1852）2月4日に病死している<sup>102</sup>、彼女が芦畷寺嬪堂へ寄進をのぞんだ地藏菩薩石像は、彼女が死去した後に完成したことになる。

それらの地藏菩薩石像は現在も芦畷寺村の墓域に残っている<sup>103</sup>。なお、地藏菩薩石像には老女八重嶋と信珠院の他に見性院の名前も見られる。この見性院の素姓は、尾張名古屋藩第11代藩主徳川斉温（源儂院、1819～1839）付の御年寄である<sup>104</sup>。

相栄坊には、同坊の檀那帳や廻檀日記帳などの文献史料が現存せず、江戸の檀那場の実態や同地での廻檀配札活動の実態などは全く不明である。したが

って、八重嶋の石仏寄進が相栄坊との師檀関係によるものなのか、あるいは一過的なものなのかは判断できないが、いずれにしても八重嶋が「地獄・極楽信仰」や「女人救済信仰」に特色がある立山信仰に、何らかの思いを寄せていたことは確実である。

ところで、八重嶋は、宝泉坊と当時既に師檀関係を結んでいた三河西尾藩第4代藩主松平乗全と、江戸城のなかで接点がありえた。

八重嶋は天保2年（1831年）より江戸城西丸大奥で將軍世子徳川家祥（後の第13代將軍徳川家定。天保12年11月に將軍世子として西丸に移徙。在職は嘉永6年11月23日～安政5年8月8日まで。安政5年7月6日没）付の老女となり、嘉永5年（1852）2月4日に病死するまでその地位にあった<sup>105</sup>。

家定の世子時代にあたる弘化2年（1845）を例に八重嶋の状況を見ると、彼女は西丸大奥では上臈御年寄が日常生活を行う「西壱ノ側」に部屋を構えており、上臈御年寄の職階者として同僚に岩岡・歌橋・飛鳥井らがいたが、序列は彼女らに次いで4番目であった<sup>106</sup>。そして、まさにこの頃の弘化2年（1845）2月15日から嘉永元年（1848）10月まで、松

平乗全は將軍世子に対してその総務を統括する江戸城西丸の老中を勤めていたのである<sup>16)</sup>。江戸城での老中と老女の関係が案外緊密であることはこれまでも指摘されているが、そうすると、西丸大奥で4番目の地位にあった八重嶋と西丸老中の乗全との関係

も十分に想定され、將軍世子徳川家祥（後の將軍徳川家定）の間近に、一時期ではあるが立山信仰と深く関係をもった人物が存在したことになる。すなわち、將軍徳川家定にまで立山信仰が及ぶ可能性が十分あったと考えられるのである。

#### 4. 江戸城や諸大名屋敷で鑑賞された立山曼荼羅「宝泉坊本」

##### 4-1. 江戸城や諸大名屋敷で鑑賞された立山曼荼羅「宝泉坊本」

宝泉坊衆徒泰音の文久元年（1861）の廻檀日記帳<sup>17)</sup>（写真1～3）を読むと、同年の4月と5月の2ヶ月間に、宝泉坊の立山曼荼羅が江戸城や諸大名屋敷などで回覧されていたことがわかる。

その内訳を具体的に見ていくと、文久元年（1861）4月15日・16日には安芸広島藩の桜田（霞ヶ関）上屋敷、同年4月19日には幕臣・永井太之丞の本郷御弓町屋敷、同年4月21日から5月6日までは江戸城の本丸と二の丸、同年5月9日から20日までは尾張名古屋藩の市ヶ谷御門外上屋敷と紀伊和歌山藩の赤坂喰違外〔南八丁堀〕中屋敷、同年5月25日・26日には加賀金沢藩の本郷上屋敷といったように、順次、宝泉坊の立山曼荼羅が回覧されているのである<sup>18)</sup>。

このなかで特に注目すべきは、文久元年（1861）4月21日から5月6日までの15日間、江戸城の本丸と二の丸に、宝泉坊の立山曼荼羅が持ち込まれたとの記載である。この時、大奥女中のみならず、江戸幕府第14代將軍徳川家茂や天璋院篤姫（江戸幕府第13代將軍徳川家定の正室）も立山曼荼羅を鑑賞した可能性がきわめて高い。ただし、家茂の正室・和宮についてはまだ降嫁前であり、鑑賞することはできなかったはずである。

##### 4-2. 立山曼荼羅「宝泉坊本」の成立（新史料の発見にともなう従来説の補足）

江戸城や諸大名屋敷で回覧された立山曼荼羅は、全47点の現存作品のうちの「宝泉坊本」である。こ

の作品の本来の名称は「立山縁起四幅」とされ、形態は掛軸4幅1対、材質は絹本、画面法量は縦140.0cm×横180.0cm（内寸）、画中に「源乗全書」の墨書銘や落款がみられる。軸裏には次の銘文（史料1）が墨書されている。

##### 【史料1】「宝泉坊本」の軸裏銘文

六十二世泰音代 立山縁起四幅自模写以寄附丹越中立山宝泉坊 西尾拾遺源乗全 安政五年戊午十二月

立山曼荼羅「宝泉坊本」については、その所蔵者の旧宝泉坊宅に同作品の寄付状（史料2）が残っている。また芦峯寺雄山神社には、芦峯寺一山が加賀藩寺社奉行に宛てたものとして、同作品の仕様とそれにまつわる祈禱伺いを併記した書状（史料3）が残っている。

##### 【史料2】立山曼荼羅「宝泉坊本」の寄付状（個人所蔵） （包紙）寄付状

（本紙）立山縁起四幅 右自模写以寄附于越中立山宝泉坊者也 安政五年戊午十二月十五日 西尾拾遺源乗全（落款）

##### 【史料3】「立山曼荼羅宝泉坊本仕様上申ならびに祈願伺につき書状」（芦峯寺雄山神社所蔵）

乍恐書付を以奉申上候

当山二者、往昔より伝来之御絵図曼荼羅有之。然所、安政五年、三州西尾城主松平和泉守殿直筆を以被書写、表装之義者、大御所様ニ奉申先、公方様之御

召衣ヲ右和泉守殿御拝領被成、夫を以被致表具、当山江御寄附之御絵図御座候。尤江戸表ニおる天、御上様奉始、夫々御大名様方御内拜被為遊御絵図ニ御座候。依而当御上様奉始、夫々様方、為御武運御長久御子孫御繁栄、現当二世安楽御内拜被為成下候様、宜敷奉願上候。以上。

卯九月

立山芦峯寺（黒印）

寺社御奉行

さらに、宝泉坊衆徒泰音の安政5年（1858）の廻檀日記帳<sup>19)</sup>には、「宝泉坊本」の成立経緯が記されている（史料4～史料6）。

【史料4】「受納記 越中立山宝泉精舎 安政五戊午歳仲冬（梵字）吉日」（芦峯寺宝泉坊土蔵文書、個人所蔵）

安政6年2月1日の条

二月朔日、中沢氏休息仕候處、先年和泉守様へ御願置当山開山直伝御絵図皆出来ニ付、去十一月十三日（部分欠損）并ニ川住市右衛門殿添書ニ而、御山十二月五日山着ニ付、阿闍梨門敞和尚開眼願ハバ、開眼仕、同九日福泉坊添書ニ而当主殿 右御絵図等差出候處、漸々正月廿九日、江戸靈岸島へ到来仕候事。先家ニ而為内拜二階座敷ニ而皆々拜礼候事。

【史料5】「受納記 越中立山宝泉精舎 安政五戊午歳仲冬（梵字）吉日」（芦峯寺宝泉坊土蔵文書、個人所蔵）

安政6年2月7日の条

（前略）夫 右 御奥參殿仕、花井殿等種々御咄申上、御目見仕候事。御絵図菊桐御幕御寄附之義相願（部分欠損）早速御聞届ニ相成。（後略）

【史料6】「受納記 越中立山宝泉精舎 安政五戊午歳仲冬（梵字）吉日」（芦峯寺宝泉坊土蔵文書、個人所蔵）

安政6年3月7日の条

三月七日、和泉守様御奥ニ而、御絵図初披露仕候事。（後略）

以上の史料1から史料6の内容を検討していくと、次のことがわかる。

立山曼荼羅「宝泉坊本」は、宝泉坊と師檀関係を結んでいた江戸幕府老中の松平乗全が、安政5年（1858）の12月以前、おそらく当時宝泉坊が所持していた既存の立山曼荼羅を参考にそれをみずからの卓越した絵画技術で模写し、新たな立山曼荼羅作品として制作したものである（史料1・史料2・史料3）。この作品に添えられた乗全自筆の寄付状によると、彼はその作品を安政5年（1858）12月15日付で宝泉坊に寄進している（史料2）。

もっとも、立山曼荼羅「宝泉坊本」のそもそもの発願者は宝泉坊衆徒の泰音であった。泰音は乗全に対し、安政5年（1858）以前に「当山（立山）開山直伝御絵図」、すなわち立山曼荼羅のことであるが、その制作を依頼していた。依頼を受けた乗全は、安政5年（1858）11月頃までに「立山縁起四幅」<sup>20)</sup>と題する立山曼荼羅「宝泉坊本」を完成させ、それを側用人の川住市右衛門行教<sup>21)</sup>を使って芦峯寺に送っている。作品は芦峯寺には安政5年（1858）12月5日に届いている。

芦峯寺一山ではその作品に対して阿闍梨門敞和尚<sup>22)</sup>が開眼供養を行っている。その後、福泉坊の当主<sup>23)</sup>が作品に添え書きを付けて、江戸靈岸島の中沢屋藤兵衛宅に返送しており、作品は安政6年（1859）正月29日、同家に届いた。中沢屋藤兵衛<sup>24)</sup>は靈岸島の一の橋角で瀬戸物問屋を営んでいた。当時宝泉坊は江戸の檀那場で廻檀配札活動を行う際、この中沢屋を宿元として活動拠点の一方所にしてきた。そこに乗全の立山曼荼羅作品が返送されたのである。作品が届くと早速、中沢屋の屋敷の二階で作品のお披露目式が行われた（史料4）。

同年（1859）2月7日には、乗全の屋敷（西尾藩

高田屋敷)の老女花井が、この作品に対して寄付した菊桐紋入りの御幕が完成している(史料5)。この幕は作品とともに現存している。

この作品が西尾藩邸の乗全やその家族、大奥女中らに初めて披露されたのは安政6年(1859)3月7日である(史料6)。ただし、その際の具体的な様子を示す史料はみられない。

ところで史料3は、立山曼荼羅「宝泉坊本」が徳川将軍や諸大名とのかかわりも含め、特別な由緒もっていることを記している。

まず、松平乗全が安政5年(1858)に描いた「宝泉坊本」の表装については、あらかじめ大御所様に願い出て、公方様から拝領して保持していた衣服を解体し、その布を表具に使用したという。ここで登場する「大御所様」と「公方様」の2名の徳川将軍はいったい誰のことか。史料4より、「宝泉坊本」が安政5年(1858)11月13日までは、表装も含めて完成していることがわかる。したがって、それ以前のさほど遠くない時期で2名の徳川将軍と松平乗全に接点ができる時期はいつかということになる。「大御所様」を安政5年(1858)7月6日に死去した江戸幕府第13代将軍徳川家定と推測し、「公方様」を安政5年(1858)6月25日に将軍継嗣となり江戸城へ入城した徳川慶福(後の江戸幕府第14代将軍徳川家茂)と推測すると、松平乗全は安政5年(1858)6月23日から二度目の老中に就任しているので、この3名には、安政5年(1858)の6月下旬から7月上旬の間に、かろうじて江戸城での接点ができることになる。松平乗全が江戸城で将軍世子徳川慶福から衣服を拝領して、将軍徳川家定からその利用の許諾を得られる時期はこのわずかな時期を除いて他にはないのである。

次に、「宝泉坊本」が芦峯寺宝泉坊に寄進された後のいつかの時期に、この立山曼荼羅は江戸表において、御上様はじめ、それぞれ御大名様方のあいだで礼拝・鑑賞されたこともあったという。ここで登場する江戸表の「御上様」はじめ「御大名様方」とは

いったい誰のことか。前項で指摘した、宝泉坊泰音の文久元年(1861)の廻檀日記帳に見る立山曼荼羅の回覧の件とも併せて考察すると、「御上様」は江戸幕府第14代将軍徳川家茂、「御大名様方」は安芸広島藩第9代藩主浅野斉粛や尾張名古屋藩第11代藩主徳川斉温、紀伊和歌山藩第12代藩主徳川斉昭、加賀金沢藩第13代藩主前田斉泰らを指すものと思われる。

さらに、このような特別な由緒をもつ作品なので、芦峯寺一山は卯年9月に、加賀藩寺社奉行に対して、当御上様にも礼拝・鑑賞していただきたいと願っている。「卯9月」の具体的な年月は、史料3が江戸時代中、安政5年(1858)以降の卯年なので、慶応3年(1867)9月に発給された文書であることがわかる。それでは、ここで登場する「御御上様」とはいったい誰のことか。それは、慶応3年(1867)9月の時期に加賀金沢藩主だった第14代藩主前田慶寧であろう。

ところで、乗全が「宝泉坊本」を描き、宝泉坊にそれを寄付した安政5年(1858)当時、乗全は老中に再任され、さらに大老井伊直弼の強硬路線に従い、安政6年(1859)夏以降、安政の大獄を遂行して尊皇攘夷派に対する弾圧を積極的に行っている。立山信仰に心を寄せながら、一方では安政の大獄を遂行する乗全の精神面に興味もたれる。

#### 4-3. 江戸城や諸大名屋敷で立山曼荼羅が回覧された背景

文久元年(1861)に宝泉坊の立山曼荼羅が江戸城や諸大名家で回覧されたこと背景には、幾つかの要因があっただろうが、そのひとつは間違いなく宝泉坊と師檀関係を結んでいた松平乗全の存在であろう。乗全の経歴は、以前、拙著『近世立山信仰の展開』<sup>25)</sup>のなかで詳述しているので、そちらを参照していただきたい。

さて、回覧された宝泉坊の立山曼荼羅の制作者が、その直前まで幕府の老中として政権の中樞にいた松平乗全であったこと、また作品が美術品としても優

れた出来栄であったこと、さらにその表具に江戸幕府第14代将軍徳川家茂の衣服が用いられていたことなどが、作品の価値を著しく高め、江戸城や諸大名家での回覧に十分資するものとして認められ、扱われたのであろう。もし、それが乗全自筆の作品でなければ、江戸城や諸大名家での回覧はありえなかったかもしれない。

この松平乗全は、近世の身分制社会においては生涯、最上級の位置に居続けた人物である。ところが、宝泉坊衆徒泰音の記した数冊の廻檀日記帳から泰音と乗全とのかかわりを見ていくと、二人の関係は互いの身分を越えて驚くほど親密だったように感じられる。

以下、泰音の廻檀日記帳のなかから、泰音が藩主乗全と直接面談している部分だけを抜粋し、それらから二人の関係を具体的な事例をとおして見ていきたい。

【史料1】：「奉納帳 越中国立山宝泉精舎 安政二卯星仲冬」(芦峯寺宝泉坊土蔵文書・個人所蔵)。

- ①安政3年2月朔日「二月朔日松平和泉守様へ参り。尤御屋敷ハ地震後高田御下屋敷へ参り。」「御上様江御目見仕、色々御咄し有之。」
- ②安政3年2月6日「六日、高田和泉守様へ参り。」「殿様御目見仕并鋭之助様御加持仕。殿様深御信仰ニ而、薬師十二符伝授致度旨被仰聞候ニ付、」
- ③安政3年3月朔日「三月朔日、松平和泉守様高田御屋敷江参り、」「御殿様迄御目見仕候。種々御咄申上候。」
- ④安政3年3月20日「廿日ニ和泉守様高田御屋敷へ参り。御奥迄通り、川住市右衛門殿ニ御目懸り、色々御咄し有之御謝礼ノ御札申上、」「殿様江御目見仕、種々御咄有之候ニ付、御老中屋敷之義ニ付御伺之上申上候。」
- ⑤安政3年4月10日「十日、中沢屋 大名小路松平和泉守様御屋敷内如例年配札仕。」「御上様江御目見仕、色々申上置いたし。」
- ⑥安政3年4月12日「松平和泉守様江参殿仕。」「御上様江御目見仕、御内意等ノ御咄有之。」「御上様(2

字欠損) 御目見仕、御表間ニ而種々御内意有之。」

【史料2】：「受納記 越中立山宝泉精舎 安政五戊午歳仲冬(梵字)吉日」(芦峯寺宝泉坊土蔵文書・個人所蔵)。

- ①安政6年1月19日「同十九日、大名小路和泉守様江参殿仕、古例之通り御奥口 登。」「御上御目見仕、種々御咄。」
- ②安政6年1月23日「上様御目見仕、種々御咄申上、」
- ③安政6年1月30日「七時ニ御上様御目見仕、種々御申上候處、」
- ④安政6年2月16日「和泉守様へ登り御目見、」
- ⑤安政6年2月28日「和泉守様へ参殿仕御目見、種々御咄申上候。」
- ⑥安政6年3月7日「三月七日、和泉守様御奥ニ而、御絵図初披露仕候事。」
- ⑦安政6年3月17日「大殿様・御新造様江御逢仕、種々御咄申上候處、」
- ⑧安政6年4月3日「松平和泉守様へ上り神前仏前初、鋭之助様へ御加持(以下欠損)御目見仕、種々御咄申上置候事。」
- ⑨安政6年4月22日「和泉大守様 御使者参り、早速上り、御目見之上御加持申上候事。」
- ⑩安政6年4月23日「四月廿三日、和泉大守様へ此解(背[うみがめ])拜見(2字欠損)候處、上様少々御腹痛ニ付、御延引ニ相成候事。」
- ⑪安政6年4月26日「四月廿六日。西尾公様花井め 手紙参りニ付、和泉大守様へ登り、神前仏前拜礼、夫 上様御加持申上、尤少々御不快ニ付、」
- ⑫安政6年5月12日「大守様へ上り御加持申上并御符差上候事。御目見之上、種々御咄下(欠損)候事。」

【史料3】：「配札日記帳 越中州立山宝泉精舎扣安政六己未星仲冬(梵字)吉日」(芦峯寺宝泉坊土蔵文書・個人所蔵)。

- ①安政7年閏3月26日「同廿六日和泉守様中御屋敷へ上ル。若殿様・御新造様ニ御目見いたし、」



- ②安政7年4月2日「和泉守様へ上ル。御目見之上御加持申上、神前仏前へ拝礼いたし。」
- ③安政7年4月7日「上様へ御目見、御役御免之義ニ付、種々御咄し申上候。」
- ④安政7年4月22日「和泉守様へ参殿仕、神前仏前拝礼いたし中食戴。夫と御目見之上、種々御祈念仕候様御咄し有之候事。」
- ⑤安政7年5月1日「和泉守様へ上り、御目見之上、種々御咄し有之。」
- ⑥安政7年5月16日「沐浴いたし白衣改、松平和泉守様へ参殿仕、御絵図招講に参り。」

【史料4】：「檀那廻日記 越中国立山宝泉精舎控文久元辛酉星仲冬（梵字）吉日」（芦峯寺宝泉坊土蔵所蔵・個人所蔵）。

- ①文久元年3月26日「和泉守様中屋敷配札仕、中沢帰り泊まり。」
- ②文久元年4月21日「四月十一日、和泉守様御使ニ付、霊岸島参り。夫と木挽町御屋敷江参殿之上、御目見御咄之有候事。」
- ③文久元年4月29日  
「是と和泉守様へ上り種々御咄し（以下欠損）」
- ④文久元年5月20日「木挽町和泉大守様と御状参りニ付、同廿日（欠損）いたし参り、神前仏前種々御咄有之事。」
- ⑤文久元年5月29日「木挽町松平和泉守様へ上り、種々御咄候事。」

さて、上記の史料1から史料4の内容を見ていくと、宝泉坊泰音は江戸での毎年の廻檀配札活動で、期間中、少なくとも5回以上は西尾藩邸を訪れている。当時、西尾藩の藩邸としては、大名小路に役邸があり（乗全が老中在任中のみ）、茅場町に上屋敷、木挽町に中屋敷、深川と白金に下屋敷、さらに詳しい所在はわからないが高田屋敷があった。ちなみに安政3年（1856）の廻檀配札活動では、安政2年（1855）の江戸大地震で深川屋敷などが被害を受け

たためか、泰音は高田屋敷の方へ出向いている。

さらに、泰音は西尾藩邸を訪れた際、藩主の乗全本人と直接面談していることがきわめて多かった。廻檀日記帳には、史料1の①・③・④・⑤、史料2の①・②・③・⑤・⑦・⑧・⑫、史料3の③・④・⑤、史料4の②・③・④・⑤などの「御上様江御目見仕、色々御咄し有之。」や「御殿様迄御目見仕候。種々御咄申上候。」といった表現や、史料1の⑥の「御上様江御目見仕、御内意等ノ御咄有之。」と「御上様（2字欠損）御目見仕、御表問ニ而種々御内意有之。」などの表現が見られる。特に「御内意」の表現から、乗全と泰音との間に、なにか人払いでもして話し合われたような秘密めいた関係がうかがわれるのである。

泰音と藩主乗全の関係がこのような状況であったから、泰音はいずれの藩邸でも藩主の家族や家臣、奥女中たちにいたる全ての人々から厚遇を得ていた。仮に藩主乗全が不在でも、その家族や奥女中の老女、側用人らが、誰かしら必ず泰音に対応している。泰音が訪れた際、一般的には茅場町の上屋敷では老女梅尾が、深川の下屋敷では木政と瀧瀬、高田屋敷では花井とお壺が彼に対応するのが常であった。藩主をはじめ、こうした親しみ深い屋敷の住人たちを相手に、泰音が御絵伝招講（立山受茶羅の絵解き）を行うこともあった。例えば、安政7年（1860）4月14日と同年5月16日に、深川屋敷で招講が行われている。また、慶応3年（1867）の5月7日夜と同年6月3日昼にも、泰音が深川屋敷で当時の藩主乗秩やその家族を前にして招講を行っている。

ところで、前記の史料1から史料4のうち、乗全の様子や乗全と泰音の関係を、さらにトピック的な内容にも着目して分析していくと、史料1の②安政3年2月6日の条から、乗全は信仰心が厚く、薬師如来と十二神將の護符を泰音に伝授したがっていたことがわかる。史料1の④安政3年3月20日の条から、泰音が乗全に、乗全が老中に就任した際に必要となる大名小路の役邸のことを聞き出そうとしてい

る。史料2の⑩安政6年4月23日の条から、泰音が乗全に海亀を鑑賞させてもらう予定であったのだが、乗全が腹痛を起こし、それが延期となったことがわかる。史料2の⑪安政6年4月26日の条から、乗全の屋敷で、当日彼が何らかの理由で不快な様子を示していたことがわかる。史料3の⑬安政7年4

月7日の条から、乗全と泰音の間では、乗全の老中辞職の件など、政治情勢などに対する話もされていたことが推測される。

これらの泰音と乗全とのやりとりには、娯楽的な面と政治的な面の両方が見られ、話題のあり方からしても、二人の間柄は驚くほどに身近だったと思われる。

## 5. 江戸城本丸や諸大名家、旗本、伝通院らによる宝泉坊への初穂料と血盆経料の寄進

文久元年(1861)の4月と5月の2ヶ月間に、宝泉坊の立山曼荼羅が江戸城や諸大名家で回覧されたことにより、そこでの立山信仰に対する関心はにわかにか高まったものと考えられる。

それをうかがわせる史料として、旧宝泉坊土蔵文書の史料群のなかに、翌年(1862)4月の「御本丸等御初穂覚 越中立山宝泉坊扣 文久二壬戌稔四月善増日」(史料1)(写真4・5)と題する初穂料と血盆経料の受納記録帳の控が残っている。以下は、同史料の翻刻である。なお、( )の記載は筆者によるものである。

【史料1】「御本丸等御初穂覚 越中立山宝泉坊扣 文久二壬戌稔四月善増日」

〔表紙〕

文久二壬戌稔

御本丸等御初穂覚

四月善増日 越中立山宝泉坊扣

〔本文〕

一、金百疋 小石川伝通院様 扨

霞ヶ関

一、金貳百疋 御住居様 扨 (安芸広島藩第9代藩主浅野齐肃の正室・末姫。末姫は徳川家斉の24女で、母は11代将軍徳川家斉の側室・お美代の方)

一、金百ひき 中奥 扨

一、金百ひき	寿操院様 扨
一、金五拾疋 寄裏町)	裏町様 扨 (末姫付上臈御年)
一、銀玉壹ツ	裏町様 扨
一、金五拾疋	かめ田 (末姫付表使亀田)
一、銀玉壹ツ	御用人 扨
一、同 三保沢)	三保沢 (末姫付上臈御年寄)
一、同	増多 (末姫付御年寄増田)
一、金壹朱	津た尾 (末姫付中年寄葛尾)
一、銀玉壹ツ	むく (末姫付御右筆むく)
一、同	磯岡 (末姫付中年寄磯岡)
一、同	満左 (末姫付御次まさ)
一、同	八十井 (末姫付表使八十井)
一、同	左地 (末姫付御右筆さち)
一、同	と代 (末姫付御三之間)
一、同	せや (末姫付御三之間せや)
一、同	よ美 (末姫付御中臈よみ)
一、同	屋川 (末姫付御右筆やつ)
一、同	某

霞ヶ関御才銭

一、一貫三百七拾九文 女中方 扨  
 〆金壹兩貳分壹朱  
 銀玉十四枚  
 銭壹貫三百七拾九文

本郷留坂

永井禄之助様

- 一、金百ひき 永井様
- 一、金五十ひき 芳善院隠宅 与 (旗本・永井禄之助〔太之丞〕の実母か義母)
- 一、金五十疋 妙智院様 (広大院付御中 臈頭)・善珠院様 (広大院付御中臈)
- 一、金五拾疋ハ回向料
- メ金貳分貳朱

御本丸御典

- 一、金三百疋 申年女性・天璋院様 与 (江戸幕府第13代将軍徳川家定の正室・篤姫)
- 一、同 午年男性・公方様 与 (江戸幕府第14代将軍徳川家茂)
- 一、金貳百疋 午年女性・和宮様 与 (江戸幕府第14代将軍徳川家茂の正室・和宮)
- 一、金百疋 き満・多い・三保木初 (三保木は天璋院付介)
- 一、金壹朱 柏木初
- 一、銀玉壹ツ 沢氏
- 一、同 川井 (天璋院付中年寄)
- 一、銀玉二ツ 婦事 (和宮付小上臈)
- 一、銀玉壹ツ 志毛 (天璋院付御次)
- 一、同 竹川氏
- 一、同 岩野 (天璋院付中年寄)
- 一、同 てよ (天璋院付御三之間)
- 一、金貳兩壹分一朱
- 一、銀玉八ツ
- 一、金五拾疋 水戸様御尼衆 与  
才せん廿四文

尾州御典

- 一、金貳百疋 市ヶ谷柏御殿 与
- 一、金百疋 三十二歳・御男性
- 一、金百疋 廿五才・御女性
- 一、金壹朱 若印

外二南百壹枚

メ金壹兩壹朱百文

- 石橋模様
- 一、御帛錢壹ツ
- 柏御殿点慎印様 与 御納ニ相成り候

紀州御典

- 一、金百疋 赤坂御殿
- 一、同 御殿
- 一、同 御殿
- 一、金壹朱 錠印

外二南百壹枚

- 一、三百拾八文 女中衆 与 御才錢
- メ金三分一朱四百拾八文

廿七日 加州様 与

- 一、金貳百疋御初尾 本郷加州様御典 与
- 一、金百疋 同奥由 与

是迄

- 七口メ金七兩・銀玉廿二ツ・錢壹貫百貳十五文
- 一、金五十疋

伝通院様 与

- 五月廿七日 御暇壹時
- 一、まき松風杉折壹ツ
- 一、縮緬黒婦与ん貳ツ
- 御膳様 与 (伝通院僧正の大宣〔第59世恭蓮社温世大宣、明治17年遷化〕)
- 一、金三百疋 御錢別
- 大康様 (伝通院の齋司)
- 大存様 与 (伝通院の内役)
- 興堂様 (伝通院の内役)
- 掛物貳ふく
- せん子壹本
- 真中手掛壹ツ
- 風呂敷壹ツ
- 大存様 与

御本丸様血盆経料

一、金五両貳分三朱銀玉五ツ

メ、紀州様

尾州様

同断

一、金拾両壹分一朱百四十文

メ尾州様・紀州様

一、金貳朱貳百文

同断

メ芸州様

一、金拾壹両貳朱八十文

同断

永井様

一、金貳両貳朱

メ 同断

メ口

メ金、廿五両三分・銀玉五ツ・銭四百廿文

五月廿七日十方メ

加州様

一、四両貳分三朱貳百六拾五文 同断

四ッ谷紺屋

福田屋新兵衛実家

武州埼玉郡下新郷村

福田屋新兵衛

上記の史料には、文久2年(1862)4月、宝泉坊が、小石川伝通院<sup>29)</sup>、安芸広島藩浅野家<sup>27)</sup>(外桜田霞ヶ関の上屋敷〔末姫の御住居〕)、旗本・永井禄之助〔太之丞〕<sup>28)</sup>(本郷留坂)、江戸城本丸、常陸水戸藩松平家<sup>29)</sup>の尼衆(屋敷は不明)、尾張名古屋藩徳川家<sup>30)</sup>

(市ヶ谷御門外の上屋敷)、紀伊和歌山藩徳川家<sup>31)</sup>(赤坂喰違外の中屋敷)、加賀金沢藩前田家<sup>29)</sup>(本郷の上屋敷)から受納した初穂料や血盆経料の金額が記されている。このうち特に注目すべきは江戸城本丸の分で、そこには天璋院篤姫と將軍徳川家茂のそれぞれ3百疋の初穂料や、和宮の2百疋の初穂料も含まれている。

ところで、この帳冊における記載対象者は、前述の通り文久元年(1861)の4月と5月の2ヶ月間に、宝泉坊の立山曼荼羅が回覧された江戸城本丸や諸大名家、あるいはそれを仲介した伝通院や旗本の永井家である。したがって、立山曼荼羅の回覧がこの寄進の一件をもたらしたものと考えられる。おそらく立山曼荼羅が回覧された時、同時に奉加帳も回されていて、その結果がこの帳冊の内容なのだろう。

この帳冊における受納金額をみておきたい。

まず、初穂料については、1口：伝通院・安芸広島藩浅野家、2口：永井禄之助、3口：江戸城本丸、4口：常陸水戸藩松平家の尼衆、5口：尾張名古屋藩徳川家、6口：紀州和歌山藩徳川家、7口：加賀金沢藩前田家までの合計金額が、帳面では金7両・銀玉22包・銭1貫125文とされている。ただし、実際に計算をすると、7両・1分・2朱・銀玉22枚・銭1貫921文・250疋・御帛銭1つとなる。そのほか、別口として伝通院が350疋・まき松風杉折1つ・縮緬黒布団2つ・掛物2幅・扇子1本・真中手掛1つ・風呂敷1つを寄進している。したがって、1口～7口と別口の合計金額は、実際の計算上、8両・1分・2朱・銀玉22枚・銭1貫・921文・200疋・御帛銭1つ・まき松風杉折1つ・縮緬黒布団2つ・掛物2幅・扇子1本・真中手掛1つ・風呂敷1つとなる。

次に血盆経料については、1口：江戸城本丸、2口：紀州和歌山藩徳川家・尾張名古屋藩徳川家、3口：尾張名古屋藩徳川家・紀州和歌山藩徳川家、4口：安芸広島藩浅野家、5口：永井禄之助までの合計金額が、帳面では金25両3分・銀玉5包・銭420文とされている。ただし、実際に計算をすると、金30両・1分・2朱・銀玉5ツ・420文となる。その

ほか、別口として加賀金沢藩前田家が4両・2分・3朱・265文を寄進している。したがって、1口～5口：と別口の合計金額は、実際の計算上、金35両・1朱・銀玉5ツ・685文となる。

この帳面において、以上のとおりに算出してきた

初穂料と血盆経料を合わせた合計金額は、実際の計算上では、43両・1分・3朱・銀玉27枚・銭1貫・1606文・200疋・御帛銭1つ・まき松風杉折1つ・縮緬黒布団2つ・掛物2幅・扇子1本・真中手掛1つ・風呂敷1つとなる。

## 6. 篤姫・和宮の将軍夫人及び江戸城大奥女中と立山の血盆経信仰

江戸時代の立山は女人禁制であったにもかかわらず、女性の救済をかなえる霊山として、特に女性の間で大変人気があった。その秘密は、立山山中の「血の池」という池水が血の色をした不気味な池にあった。その池にまつわる血の池地獄の思想及び血盆経信仰を、芦峠寺や岩峠寺の衆徒たちが、池の実在とその恐怖、救済を喧伝しながら全国各地で布教したことで、女性たちの救済願望をしっかりと受けとめ、満たしていたのである。

「血の池」の名称は、月経や出産の出血が不浄を他に及ぼす罪から、女性だけが墮ちるとされた血の池地獄に由来する。この地獄は血盆池地獄とも別称されるように、「血盆経」という420字余りの短文の経典に基づいて創造された。同経典は10世紀（明の時代）に中国で成立した偽経で、日本には室町時代頃に伝来した。この血の池地獄の思想は、江戸時代、民衆の間で既に浸透しており、芦峠寺や岩峠寺の衆徒は布教の際、立山が女性救済を実現する類い希な霊場であることを強調して説いた。そして血の池地獄から救われるための血盆経や月水不浄除の護符を積極的に頒布し、また地元立山で芦峠寺衆徒や岩峠寺衆徒が催す血盆経投入儀礼に対して納経したり、芦峠寺で毎年秋の彼岸の中日に行われた布橋大灌頂法会に参加すれば救われると説いた。

さて、前掲の文久2年（1862）の「御本丸等御初穂覚 越中立山宝泉坊扣」には、江戸城本丸大奥や諸大名家などから宝泉坊へ納められた初穂料とともに、血盆経料も記載されている。この他、宝泉坊の土蔵で見つかった古文書史料のうち、血盆経の納経

者を列記した文久2年（1862）の「立山血池地獄血盆納経記帳」には、直接、篤姫や和宮の名前でこそ記されていないが、江戸城本丸からの寄進分として、筆頭に「申ノ御歳 御女性」の表記で篤姫が、「午ノ御歳 御女性」の表記で和宮が記載されている。ちなみに、篤姫は7年分の納経とそれに関する供養を、和宮は1年分のそれを宝泉坊に依頼している。また、文久4年（1864）の宝泉坊の「布橋灌頂会執行奉加帳」の表紙には、破損が著しくその詳細は不明だが、和宮の名前が見られる。さらに、その本編には先述と同様、二カ所に「御女性」の表記が見られ、その旁に「天璋院様分」「和宮様分」と注記がなされている。さらに、元治元（1864）年の「布橋灌頂会執行奉加帳」から、篤姫と和宮が白布料、祈祷料として金2000疋と金1000疋を寄進していることがわかる。

これらの事例から、当時、篤姫や和宮らの将軍夫人をはじめ、多くの大奥女中らが、立山の血盆経納経儀礼や布橋大灌頂法会といった女人救済儀礼に関心を示していたことがわかる。

こうした勧進活動を一層効果的に行うため、立山衆徒の教具の立山曼荼羅には、源信の『往生要集』に基づく釜ゆでや舌抜き、火車などの責め苦の他に、血の池地獄が真紅の強烈な色彩で描かれていた。そこには血の池地獄に墮ちた女性たちが、血でできた池に首までどっぷりと没かり、苦悶の表情を浮かべている様子や、そこへ女性たちを救うために、池の中から蓮の葉と蓮台に坐した如意輪観音菩薩が現れた様子などが描かれている。篤姫や和宮をはじめ、多くの大奥女中らが立山信仰に魅せられたのは、お

そらく、数ある民間信仰のなかでも、唯一立山信仰だけの特性といってもよいのだろうが、抽象的な概念だけにとどまらず具体的な行動を伴った血盆経納

経儀礼や布橋大灌頂法会などをそなえた、女人救済信仰としての要素に対してであったのだろう。

## おわりに

以上の分析内容を整理しておきたい。

江戸時代後期、立山信仰は庶民層にだけでなく、江戸城の関係者など近世身分制社会の最上級の人々にも受け入れられていたことがわかった。具体的には、江戸幕府第11代将軍徳川家斉の夫人の広大院に従事した御年寄の大奥女中らをはじめ、江戸幕府第12代将軍徳川家慶に従事した上臈御年寄（上臈御年寄は大奥女中の最高位である）の山野井、さらに幕末期には、江戸幕府第13代将軍徳川家定の夫人の天璋院篤姫や側室の豊儉院（お志賀）、江戸幕府第14代将軍徳川家茂の夫人の皇女和宮、彼女たちに従事した大奥女中らとのかかわりがみられた。この他、幕政を担う松平乗全のような老中や徳川御三家、安芸広島藩浅野家、加賀金沢藩前田家らの諸大名家、さらには徳川家菩提寺の伝通院とのかかわりもみられた。

現存の史料を管見する限り、芦崎寺宝泉坊と江戸城大奥との関係を示す史料の初出は、宝泉坊の土蔵から見つかった天保3年（1832）の文書であるが、そこからは、先述の広大院に従事した大奥女中たちとの関係がうかがわれた。なお、当時の宝泉坊の住職は第45代照円であった。遅くとも天保期以降、宝泉坊の第45代照円及び第46代泰音の二人が、江戸城本丸の最上級の人々や諸大名家の人々との関係を築き、立山信仰を広めていた。

文久元年（1861）の衆徒泰音の廻檀日記帳を読むと、同年の4月21日から5月6日の15日間、江戸城本丸と二の丸に宝泉坊の立山曼荼羅（現在の立山曼荼羅「宝泉坊本」）が持ち込まれ、城内の人々に鑑賞されていたことがわかった。さすがに泰音は城内に入れなかったとみえ、その時の様子は記されていない。

い。だがこの時、大奥女中たちだけでなく、将軍徳川家茂や天璋院篤姫も立山曼荼羅を鑑賞した可能性はきわめて高い。ただし和宮は降嫁前であり、鑑賞できなかった。ちなみに、その立山曼荼羅は宝泉坊と師檀関係を結ぶ幕府老中の松平乗全が安政5年（1858）に自ら描いて、同坊に寄進したものであった。表具には乗全が将軍世継徳川慶福（後の14代将軍徳川家茂）からかつて拝領した衣服が用いられていた。乗全は江戸城で老中として影響力があったが、その乗全と泰音とは西尾藩邸で度々面談するなどきわめて親密な関係にあり、江戸城などでの立山曼荼羅の回覧についても、乗全が後ろ盾となって、宝泉坊の活動を支援していたのではないかと考えられる。

ところで、立山曼荼羅「宝泉坊本」が江戸城内で鑑賞された際には、宝泉坊への奉加帳も一緒に回されていたので、翌年、宝泉坊は多額の初穂料を得ていた。文久2年（1862）4月の「御本丸等御初穂覚越中立山宝泉坊扣」によると、尾張藩邸や紀州藩邸、加賀藩邸、伝通院などから得た初穂料とともに、江戸城御本丸から得た初穂料も記されており、ちなみに、天璋院篤姫と将軍家茂はそれぞれ300疋、和宮は200疋の初穂料を宝泉坊に納めている。この史料に和宮の名前が見られるのは、文久2年2月に家茂と和宮の婚儀が執り行われ、既に和宮が江戸城に入居していたからである。

文久元年（1861）に立山曼荼羅が江戸城に持ち込まれた出来事は、大奥女中たちの立山信仰ブームに一層火を付けたと考えられる。文久2年（1862）に降嫁した和宮はそのまっただ中に入ったことになる。

江戸城や諸大名家における血盆経の納経者を列記した文久2年（1862）の「立山血池地獄血盆納経記

帳」には、直接、篤姫や和宮の名前でこそ記されていないが、江戸城本丸からの寄進分として、筆頭に「申ノ御歳 御女性」の表記で篤姫が、「午ノ御歳 御女性」の表記で和宮が記載されている。ちなみに、篤姫は7年分の納経とそれに関する供養を、和宮は1年分のそれを宝泉坊に依頼している。また、文久4年(1864)の宝泉坊の「布橋灌頂会執行奉加帳」の表紙には和宮の名前が見られる。さらに、元治元

(1864)年の「布橋灌頂会執行奉加帳」から、篤姫と和宮が白布料、祈禱料として金2000疋と金1000疋を寄進していたことがわかった。これらの事例から、当時、篤姫や和宮らの將軍夫人をはじめ、多くの大奥女中らが、立山の血盆経納経儀礼や布橋大灌頂法会といった女人救済儀礼に関心を示していたことが明らかとなった。

## 註

- 1) 望月真澄氏の論文には以下のものがある。「幕末期の社会と法華信仰—江戸城大奥女性の旗曼荼羅信仰を中心に」(『日蓮教学とその周辺』439頁～460頁、立正大学日蓮教学研究所、山喜房仏書林、1993年)、「江戸城大奥女性の稲荷信仰—江戸法養寺の熊谷稲荷を中心に」(『大崎学報 通号150』157頁～180頁、立正大学仏教学会、1994年)、「近世武家の法華信仰—江戸城大奥女性の七面信仰と祈禱との関係を中心に」(『印度学仏教学研究 45巻1号 通号89』244頁～247頁、日本印度学仏教学会、1997年)、「江戸城大奥女性の代参について—鼠山感應寺の事例を中心に」(『身延論叢 通号5』119頁～150頁、身延山大学仏教学会、2000年)、「江戸城大奥女性の信仰活動—江戸鼠山感應寺の代参を中心に」(『宗教研究 73巻4号 通号323』日本宗教学会、2000年)、「江戸城大奥「祈禱所」の機能と性格—江戸法養寺の事例を中心に」(『身延論叢 通号6』45頁～67頁、身延山大学仏教学会、2001年)、「綱要導師のの宗学意識」(『大崎学報 通号146』29頁～50頁、立正大学仏教学会、1989年)、「特集研究 江戸城大奥女中の信仰と“祈禱所”」(特集 江戸三〇〇年 將軍家の女たち)(『歴史読本 49巻2号 通号771』136頁～141頁、新人物往来社、2004年)、『法華信仰のかたち—その祈りの文化史』(大法輪閣、2007年)。
- 2) 芦峠寺宝泉坊土蔵文書(仮番号97)(個人所蔵)
- 3) 『檀那廻日記 越中国立山宝泉精舎控 文久元辛酉星仲冬(梵字)吉日』(芦峠寺宝泉坊土蔵文書・個人所蔵)。期日不明の条。
- 4) 「広大院様附比丘尼」(『清華閣 祿編 甲集卷第十』所収、国立国会図書館)。
- 5) 「東都檀那帳 越中立山宝泉坊興脈控 慶応二年寅正月日」(芦峠寺雄山神社所蔵)。
- 6) 「芦峠寺宝泉坊の江戸での檀那場形成と「立山信仰」の展開(1)」(『富山県[立山博物館]研究紀要 第15号』所収、27頁・28頁、富山県[立山博物館]、2008年5月)。
- 7) 「御祈禱檀那帳 扣 立山芦峠寺宝泉坊照円 天保十己亥年正月大吉祥日」(芦峠寺宝泉坊土蔵文書・個人所蔵)。
- 8) 畑尚子「將軍代替わりにおける大奥女中の人事異動」所収の第6表「老女一覧」(『国史学 第183号』所収、58頁～60頁、2004年4月)。
- 9) 「御祈禱□(1字摩耗消滅)」(高瀬保編『越中立山古記録 第2巻』所収、83頁、立山開発鉄道株式会社、1990年4月)。
- 10) 山崎明代編『越中古文書(越中資料集成9)』(第13巻、上新川郡2、78号文書、544頁、桂書房、1991年6月)。
- 11) 『柏御殿日記』(徳川林政史研究所所蔵)。西丸老女八重嶋病死二付、御香典銀二枚表使迄女中奉文を以被下置候。八重嶋 天保二年世子家定付老女、嘉永五年二月四日病死
- 12) この2体の地藏菩薩石像は芦峠寺村の墓域に現存する。1体は相栄坊の墓所に立ち、江戸城

西丸大奥の老女八重嶋に関する銘文が見られる。その詳細は『立山中宮寺跡石造物分布調査報告書』(石造物A—57番、19頁・20頁、富山県[立山博物館]、1993年3月)を参照のこと。あとの1体については、最近、立山博物館職員の杉本理恵氏が墓域内の他所で発見したが、無銘ながらその形態が相栄坊墓所の尊体と極似しているのでは間違いないと思われる。

- 13) 「安政二卯年 年番取扱覚(東京都江戸東京博物館所蔵)」(『東京都江戸東京博物館研究報告第14号』所収、245頁、東京都江戸東京博物館発行、東京都江戸東京博物館・都市歴史研究室編集2008年3月)。
- 14) 9) 参照。
- 15) 畑尚子『江戸奥女中物語』(134頁・135頁、講談社、2001年)。畑氏が、家定世子時代にあたる弘化2年(1845)6月の西丸大奥長局の部屋割り(東京都江戸東京博物館所蔵)に記された人名を、「西丸大奥向惣絵図」(東京都江戸東京博物館所蔵)に当てはめて作成された「弘化二年西丸大奥図」を参照のこと。
- 16) 『西尾市史 近世 下 三』(65頁)。
- 17) 『檀那廻日記 越中国立山宝泉精舎控 文久元辛酉星仲冬(梵字)吉日』(芦峠寺宝泉坊土蔵文書・個人所蔵)。
- 18) 『檀那廻日記 越中国立山宝泉精舎控 文久元辛酉星仲冬(梵字)吉日』(芦峠寺宝泉坊土蔵文書・個人所蔵)。

「御絵図弘通覚。四月四日、田所町高砂屋平吉方へ。三月九日外十六日、深川神保様同所中井善蔵。三月廿四日、本所番場仏母庵。三月十八日、小林金平殿。三月廿九日、松平大隅守様へ。四月十一日、大沢肥前守様江。三月晦日時分二葉屋参り候事。四月六日、石井氏江。四月廿三日、越後屋勘蔵江。四月廿六日、稲葉様御内杉本氏江。四月九日、寺嶋円蔵。四月八日、伝通院。四月十二日、尾州屋半七殿。三月三日、中田清兵衛殿。四月十三日、小田徳太郎。同晩、鈴木岩治郎殿。四月十四日、朝岡様。四月十四日昼、三笠半兵衛殿。四月十日、升屋与七。四月十四日晚、相模屋佐兵衛殿。四月十二日、尾張屋半七。四月十五日と十六日迄、霞ヶ関御屋敷。四月十九日、本郷永井様。四月廿一日と五月六日迄、御本丸。五月九日と廿日迄、尾張様・紀州様。五月廿五日と同廿六日、加州様。」

- 19) 「受納記 越中立山宝泉精舎 安政五戊午歳仲冬(梵字)吉日」(芦峠寺宝泉坊土蔵文書・個人所蔵)。
- 20) 松平乗全が自ら制作した立山曼荼羅の名称を「曼荼羅」などとはせず、「立山縁起四幅」としたことは、そもそも発願者の泰音が「当山(立山)開山直伝御絵図」、すなわち立山開山縁起絵図として、立山曼荼羅の制作を乗全に依頼したことによるものであろう。
- 21) 『大武鑑 第10巻』(文久元年の15頁、大治社、1936年8月)には、川住市右衛門は側用人格となっている。宝泉坊の慶応2

年の東都檀那帳(芦峠寺雄山神社所蔵)に、「上深。一、川住市右衛門様。守・並・供。行教殿御絵伝御造営之砌、万端御世話被下。万延元庚申五月西尾江御引越被成。」と記されており、立山曼荼羅「宝泉坊本」の制作に関わっていたことがわかる。

- 22) 阿闍梨門敞和尚は等覚坊門敞である。「長官様長帳 芦峠寺中郎武兵衛 同等覚坊 文化拾四丑年八月吉日」(高瀬保編『越中立山古記録 第2巻』所収、79頁、立山開発鉄道株式会社、1990年4月)。門敞は文久2年(1862)12月13日より芦峠寺一山長官に就任している。
- 23) この福泉坊の当主は弘音と考えられる。宝泉坊の住職泰音は元来、福泉坊の出身であり、後に宝泉坊照円のもとへ養子に入った。したがって当時の福泉坊の住職弘音とは兄弟であった。弘音が兄、泰音が弟である。こうした関係から、福泉坊当主の弘音が添え書きをして、弟の泰音のもとへ乗全の立山曼荼羅を送ったのであろう。
- 24) 中沢屋藤兵衛：瀬戸物問屋(霊岸島町長八地借)。「諸問屋名前帳 細目(4)」(2頁、国会国会図書館、1964年7月)。中沢屋藤兵衛：瀬戸物問屋(霊岸嶋一之橋角)。花咲一男編『江戸買物独案内』(337頁、渡辺書店、1972年3月)。
- 25) 拙著『近世立山信仰の展開—加賀芦峠寺衆徒の檀那場形成と配札—』(276頁～281頁。岩田書院、2002年5月)。



- 26) 伝通院は、応永22年(1415)、浄土宗第七祖了誉聖上人が開山した寺院である。当時は小石川極楽水の小さな草庵で、無量山寿経寺という名で開創された。慶長7年(1602)、徳川家康公のご生母於大の方が死去し、この寿経寺を菩提寺と定め、於大の方の法号「伝通院殿」から「伝通院」と呼ばれるようになり、徳川家康の庇護のもと大伽藍が整えられた。また、関東十八檀林の一つとして学僧の修行勉学の場となった。徳川大奥代々の墓がある。
- 27) 安芸広島藩42万6500石浅野家第9代藩主・浅野齐肃(1817～1868)。江戸城大奥に住む将軍の姫君が大名家に降嫁した場合、その姫君の嫁ぎ先の大名家では「御住居様」と称すが、その権力

はたいへん大きなものであった。安芸広島藩では、第9代藩主・浅野齐肃のもとに、11代将軍徳川家斉の24女で、母が徳川家斉の側室・お美代の方の末姫が正室として嫁いでいる。安芸広島藩の御住居様については、畑尚子氏『江戸奥女中物語』(153頁～161頁、講談社、2001年8月)に詳しい。

- 28) 永井禄之助は文久3年に、禄之助→太之助→太之丞と改名している。養祖父は永井太之丞。養父は永井兵次郎・書院番。永井禄之助(太之丞)の居屋敷は本郷御弓町。禄高は2000石。役職は文久3年12月15日に書院番より使番、慶応2年12月29日に御役御免、勤仕並寄合。禄之助の養父兵次郎は書院番。禄之助の実父は永井肥前守西丸若年寄

[永井尚佐・肥前守、若年寄在職は文政10年12月20日から天保10年4月19日]。小川恭一編『寛政譜以降 旗本家百科事典(第4巻)』(1933頁、東洋書林、1998年5月)。永井芳善院は禄之助の実母か義母のいずれかである。永井智芳は禄之助の妻である。御本丸善珠院と妙智院は第1章を参照のこと。

- 29) 常陸水戸藩35万石徳川家第10代藩主・徳川慶篤(1832～1868)。
- 30) 尾張名古屋藩61万9500石徳川家第15代藩主・徳川茂徳(1831～1884)。
- 31) 紀伊和歌山藩55万5千石徳川家第14代藩主・徳川茂承(1844～1906)。
- 32) 加賀金沢藩103万石前田家第13代藩主・前田齐泰(1811～1884)。

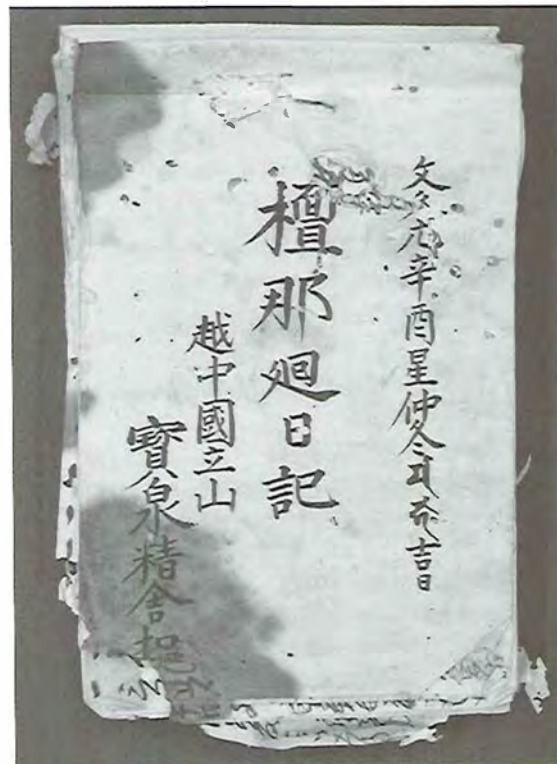


写真1：「檀那廻日記 越中国立山宝泉精舎控」(文久元年)の表紙



写真2：「檀那廻日記 越中国立山宝泉精舎控」(文久元年)の部分

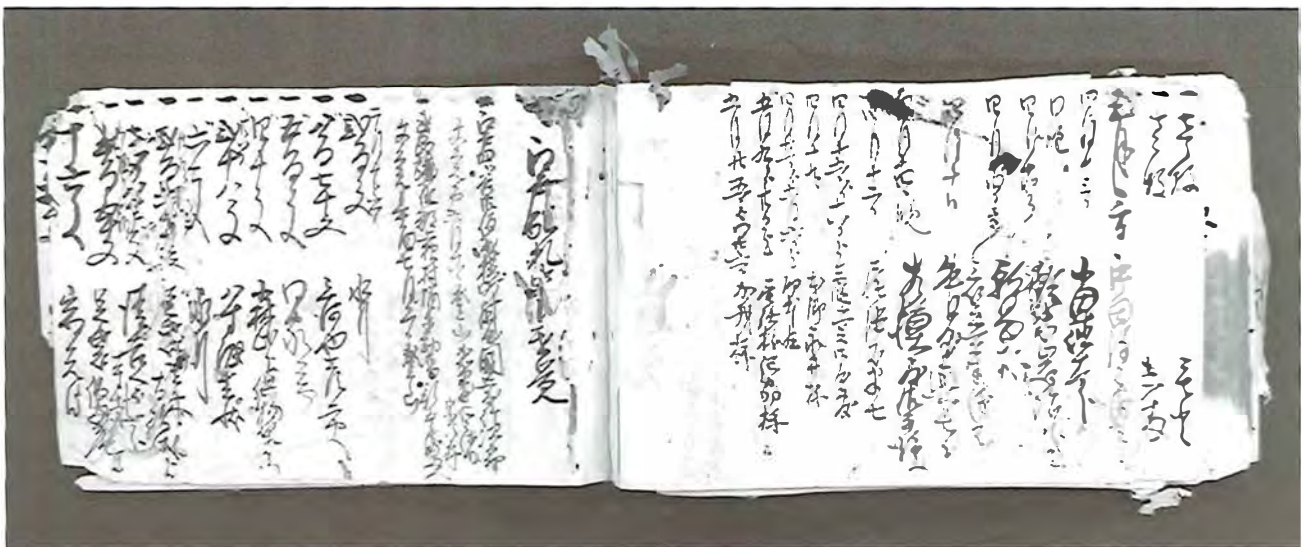


写真3：「檀那廻日記 越中国立山宝泉精舎控」(文久元年)の部分

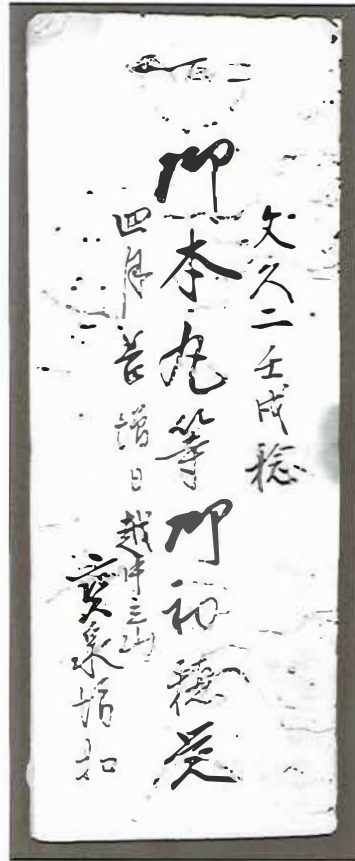


写真4：「御本丸等御初穂覚 越中立山宝泉坊控」(文久2年)の表紙

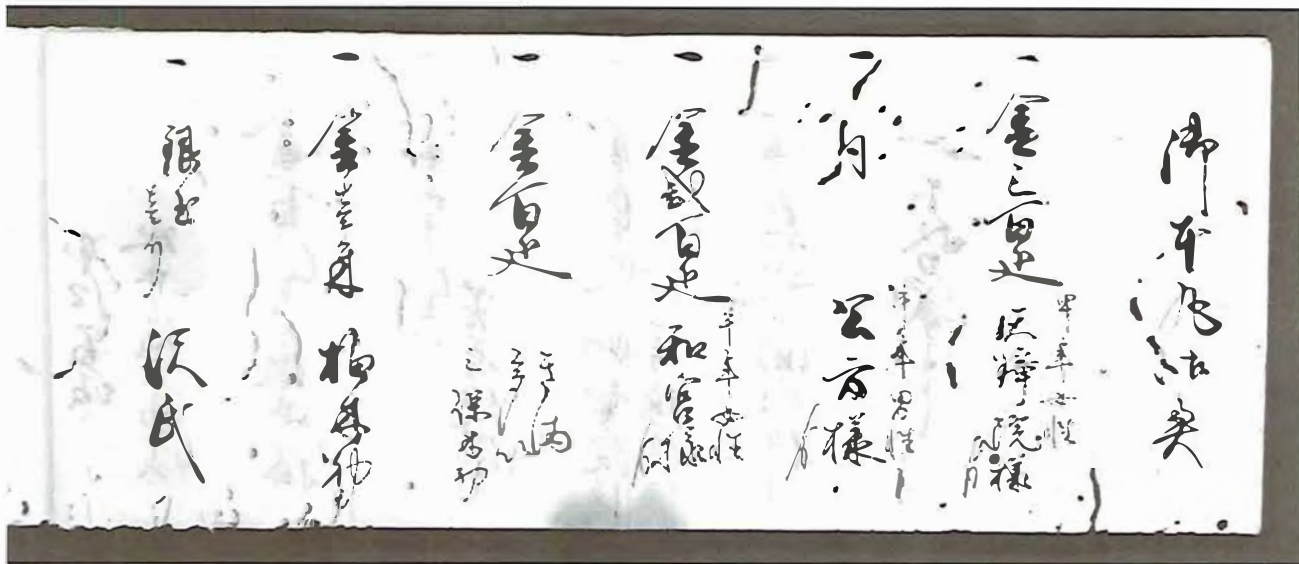


写真5：「御本丸等御初穂覚 越中立山宝泉坊控」(文久2年)の部分